

ぶつかり合った衝撃で緋炎・改の刀身を覆っていた炎が撒き散らされる。非殺傷設定のため熱さを感じる事はないはずだが、肌には確かな熱が灯る。

「くっ!!」

「んっ!!」

重ね合わせたデバイスを引き離し二人はお互いに距離を取る。炎の欠片が巻き起こった微風に千切れて消えた。

アリサは両手で緋炎・改を握り、水平に構える。すずかは逆手に悠遠を持ち、自分の背後へ隠すような格好で構えている。

わずかな間――。

そして視線が交錯した瞬間、二人はほぼ同時に地面を蹴った。魔力を孕んだ衝撃波が二人に付き従い、やがて激突する。

遡る事、一週間前――。

蝉の声がすつかり耳に馴染んだ夏の日。ようやく期末試験を終えた教室内は、間もなく訪れる夏休みに向けて浮き足立っていた。

――だがそれとは対照的な声が響き渡る。

「どういう事よっ!!」

一瞬にして室内が凍り付いた。声の主であるアリサは机を挟み、相手と向き合ったまま微動だにしないので、傍らに居たすずかが代わりに周囲へ頭を下けている。

「だからな、急に仕事が入って無理なんやて」

向かいのはやては申し訳なさそうに眼前で手を合わせ、頭を下げた。しかし納得のいかないアリサは腕を組み、彼女を見下ろしたまま。

「それはいいわ。仕事なら仕方ない、その辺の分別は付くわよ。私が言ってるのはそこじゃなくて……」

既にアリサは魔法遣い――正確には魔導士――になった友人達の事情をしつかりと把握していた。今回の試験でもすずかと協力して、担当教諭から羨ましがられるほどの授業ノートを作り、勉強が疎かになりがちな三人に提供している。

「なのはから聞いたわよ。試験前にその急な仕事は決まってたって。……はやては今回の計画の言い出しっぺでしょ?」

「それは……」

はやてはアリサの後ろで小さくなっている友人に視線を投げた。なのははただ手を合わせるだけで、アリサの対応ははやてに丸投げの状態。フェイトも同様、と言

うよりこちらは泣きそうなほどオロオロしている。

「少しでも皆と一緒に遊ぶ時間増やそうって予定組んだのに……」

憤然としていたアリサの表情は徐々に憂いを帯びて……。

「もう、アンタ達で勝手にしなさい!」

そう言い放つと、彼女は踵を返しきささと教室を出て行ってしまった。

「ハア……」

「……………」

はやては深い溜め息を吐き、なのはとフェイトは俯き黙り込む。

「……………ゴメンね。アリサちゃん、凄く楽しみにしてたから。絶対追試は受けさせないって毎晩ノートと格闘してて」

居たたまれなくなったすずかは必至にアリサを弁護し、なおかつはやて達にも謝罪する。

「ええよ。悪いんは私らや。ちよお距離置いた方がええけど、後でちゃんと謝る」はやてはそうキツパリと言い「うん」「私も」となのは、フェイトもそれに続く。

「そやから。今だけはアリサちゃんのフォロー……」

「うん。私がちゃんとして置くから」

はやての言葉の先を汲み、アリサが忘れていった鞆と自分のそれを持って、すずかは彼女の後を追いかける。

「ゴメンな――。今回は二人だけで楽しんで来てな――……」

背後から追いかけて来たその言葉を、すずかはしつかりと受け止めていた。

そして再び、現在――。

「アリサちゃんっ!!」

すずかの注意も虚しく、体勢の崩れたアリサに飽和していた魔力が一気に迫り、

「きゃあっ!!」

そのまま魔力エネルギーの洗礼を浴びる。身体が数倍の重さになり、息が苦しい。

「えいっ!!」

悠遠を構えずすが水平にそれを薙ぐ。刹那、アリサの頭上の魔力が霧散した。

「大丈夫!? アリサちゃん!」

「……………うん」

その場に尻餅をついたまま、アリサは悔しそうな声色で返事をする。どうやら怪我はしていない様だ。アリサの顔を覗き込んでいたすずかはホッと一